

# 特集 教材としての小林秀雄

何を読むか どう読むか

日常の水際で、小林秀雄を読む — 引用でつづる教材研究余話 —

岩崎昇一

だけれども、自分の望むところに生きるのではない。不如意な立ち位置で必死にいきている。そのやむに止まれぬ人心の動きや思いがその時代の相にいろいろりをあたえているのだ。美も文学もそこから鋭く磨かれて形を為す。それは、小林の論じる乱世であろうと高度なる情報化社会であろうと変わりはしない。むしろ現代の情報社会が私たちの情操を一層の混乱へと引き込んでいとも言えるだろう。混乱は生活の実感と情報との乖離から生まれる。立つべきところは、いまここに生きる生活と身体であるのに無用の解説や解釈がメディア空間を支配する。小さき者の迷い、焦慮、不安はここまで生きて来た実感に底知れぬ揺らぎをあたえる。

一方、手に負えぬメカニズムと情報に支配されたあたりを見渡せば（花も紅葉もなかりけり）、近代社会は私たちを日和見なる評論家に仕立て上げた。分かることを建前とする概説があふれ、したり顔の論者もてはやされる。巷間にはつきなみで類型的な言説が、日々人間の真相（深層）を貧しくさせている。そんな状況にあつて小林の言説が輝きを増す。

芸術も美も容易に分からぬものなのだ、と小林は言う。止むにやまれぬ人間の条件にむけて命の深層を歴史から、文芸から語り起こそうとする。しかし、私たちの日常は歴史からの語りを忘れている。死者の累積の中に歴史は幻影として存在

する、物言わぬ深層である。だから、それは思い出すことによってしか現代にのみがえらない。思いではひととき満ち足りた時間をあたえてくれる。私たちの言葉（感性）が、そこからやってきてやがてまた還る無私の領域である。思いでは私たちが選ぶのではない、思いでの側が私たちを選んでくれるのだ。空無な待機の時間に耐えて、美の萌芽ともいえる中世の時空に身を任せる。そこに作為が働く余地はない。そうして展かれた美と文学の時空がかけがえない生活を満たす、と小林は教えてくれる。

しかし、そんな詩的な時間はめつたにやつてこない。

私たちはどんな人災や天災に遭遇しようとも平常心をたもち、秩序や文化を探してはこころの繋がり、確かなものへの手ごたえを得ようとする。変わらぬ歴史に立ち返り、常なるものを見つけようと焦慮している。民衆の地産地消が循環してはじめて明日への構想が立ちあがる。荒地に芽を出した植物がやがて花をつけ、実を結ぶ。その時は、もうどんな過去の経緯も言葉（観念）も消えてしまうだろう。しかし、グローバル闘争社会は効率と時間に制約されて、人々はまるで人間

になりつつある一種の動物のようだ。昨日の悲惨を乗り越えてあらたな幻影の虜になる。不可避なものに立ち向かうまだらな死者の情念を打ちすえて、明日への臨界に混迷している。私たちは、歴史(自然)に立ち帰ろうとして実は拒絶されているのかも知れない。

そんな方途のない日常の水際に立ち、私たちは必死の思いで生きるとはなにかを問いつけている。自己の存在理由(あるいは正当性)について、それゆえの自己の生きる意味について……。他者への気遣いに疲労困憊しながら少なくともつらつとした感受性を保ち、この時代の孤独や不安に立ち向かおうと日々奮闘しているにちがいない。それ自体では接ぎ木に過ぎないと知りながら、メディアのことばや外来の思想がもてはやされるゆえんだ。それらは私たちのことばや考え方のみならず、感性(身体)までをも支配しているかにみえる。そんな時代にあつて……。

言葉は目の邪魔にさえなるのだ、と小林は論ず。

自然を前にして感動する身体ふるえ、その戦きこそが新しい解釈や方法から私たちを救ってくれるものだから、じつと

目を凝らして見つめほかはない。そこに見えた美を求めるところが他者を内側から理解する、愛するための道筋である。ただ目的もなく沈黙に耐えて名もなき小さな花を見つめること、その飽くなき繰り返し返しが知識や学問の遊戯を砕いてもその真の姿に至る、現代の乱世を生き抜く知恵である。だが、見ることに感ずることがそれほど確かなことであるのか。おのれの好みに開き直った直観や優劣を巧みに説き、自己の救済を遂げようとするなら、その修辞法はいずれ自壊へと向かう。言葉による検証と他者の言説に圧殺される、小さき者のつぶやきが静かに反撃を開始する。

小林の言説も、すでに生の現実に対するひとつの観念にすぎない。

どうも知識の遊戯に過ぎまいといい、言葉だけを辿って思わせぶりの文句だとか拙劣な作品だとか言っても意味がない。あるいは、史実ではあるまいと言ったところで面白くないことだと、工芸を論じる時でさえしばしば小林は理を超えて他説を非難する。だが、小林の修辞法もまた同じ批評の眼にさらされる。他説を斥けて、自説の神髄を披露する時逆説の修辞法があきらかにされる。ついにおのれ

の夢を語ることに過ぎないと、批評の命運を知悉する小林の面目躍如たるところである。むしろ、その魅力ある文体にこそ真意がやどっていると言えるだろう。常に接近する外来の思潮に翻弄されては、成熟を遂げてきたこの国の文芸の宿命を、近代という側面から生きた小林の文章は、今日の私たちにとつても、立ち返りつつ批判を受け、再び読まれては輝きをますものとして存在する。

その意味で、高校の現代文教材の漱石や鷗外の近代小説における役割りを文芸評論というジャンルにおいて果たしています。今後異文化や多言語との付き合いがますます深化するだろう。そんな時代にあつて私たちの歴史と文芸に出会う機会を、小林の評論文は与えてくれる。混迷の時代に高校の現代文の授業で出会い、小林の思想と修辞法を批判的に読解することは、ひとつのたしかな指針となり得ると考える。

注 本文は、小林秀雄の引用で成り立っている。三省堂 国語教科書教材テキスト「美を求める心」「無常とやうこと」と「罅」(平成二五年度センター試験問題文)からは特に多く引いている。

(いわさきしょういち・東京都立国際高等学校)